

特集展示

生誕100年 元永定正展

— 漫ちゃん、もーやん、MOTONAGA SADAMASA —



2022年

9月6日(火)―12月11日(日)

会場 三重県立美術館 企画展示室 1―3 室

主催 三重県立美術館

助成 公益財団法人岡田文化財団

公益財団法人三重県立美術館協力会

特別協力 モトナガ資料研究室

三重県立美術館では2022年秋、生誕100年を記念して、元永定正（1922～2011年、三重県生まれ）の特集展示を開催しました。当館ではこれまで二度、元永定正展（1991年、2009年）を開催し、現在約70点の作品を収蔵しています。今回は、当館のコレクションを中心に元永の活動の全容を紹介するほか、新たな切り口として出身地・伊賀との関わりにも着目しました。元永が画業をスタートさせた伊賀時代の作品や、伊賀で関わりのあった作家の作品、資料など、これまで紹介する機会の少なかった部分にも光をあて、画家・元永定正の表現の源流をさぐることを展覧会のテーマとして紹介しました。



第1部 伊賀から出発！

元永定正は1922年11月26日、三重県阿山郡上野町桑町（現・伊賀市上野桑町）に生まれました。小学校高学年のころに抱いていた将来の夢は、映画俳優か歌手か絵かき。三重県上野商業学校を卒業後、大阪や京都、郷里伊賀を行き来しながらいくつかのの仕事に就き、漫画や絵画を描き始めます。

長年の活動拠点であった関西では、「もーやん」と呼ばれることの多い元永ですが、郷里伊賀では親しみを込めて「（漫画家の）漫ちゃん」と呼ばれています。漫画家を目指し、絵を描きはじめていた元永に絵の道を教えたのは、伊賀在住の洋画家、濱邊萬吉（1902～1998）でした。濱邊は戦前、帝展（文展）に続けて入選した実績を持ちますが、濱邊に限らず、戦前の伊賀上野は「洋画のまち」と呼ばれるほどに多くの洋画家を輩出した地でもありました。

事の始まりは大正後年。関東大震災により東京の自宅を焼け出された洋画家の奥瀬英三（1891～1975）が郷里の伊賀に戻り、翌年に絵画、彫刻を研究する蒼丘社^{そうきゅうしゃ}を立ち上げます。この会に参加していたのが、当時の県立上野中学校に図画教諭として赴任していた中田恭一（1895～1960）や、その教え子にあたる濱邊萬吉、松浦莫章（1910～1998）らでした。彼らは地元の公会堂などを会場に洋画の展覧会を毎年開き、会の活動を通して切磋琢磨します。当時の帝展出品者の大半は東京や大阪、京都在住者である中、伊賀上野からそろって複数人が入選するという快挙に地元が活気づいたことは想像に難くありません。

戦時中に疎開してきた文化人を受け入れたのも、「地元の名士」として名の通った濱邊らでした。戦後すぐの伊賀では音楽鑑賞会や文学の会、茶会などが催され、元永もそうした会に文字通り飛び込んで、文化的空気を吸い込んでいきました。この経験が後年、「具体」での活動や他領域の作家とのコラボレーションなど、元永が多様な人々との交わりの中でその活動を展開させていく支えとなったのではないのでしょうか。ここでは、戦前から戦後にかけて元永と関わりのあった伊賀の作家、資料を紹介し、「土壌としての伊賀」の可能性を探ります。

1

元永定正 《自画像》＊
1930年代後半～1940年代前半
41×27 水彩・紙
個人蔵



5

能人形（筒井景春作）
不詳
彩色・人形
個人蔵



2

元永定正 《自画像》＊
1940年代前半
36×25.3 コンテ・紙
個人蔵



6

奥瀬英三 《窓際の静物》
1925年
117×91.6 油彩・キャンバス
三重県立美術館蔵



3

元永定正 《風景》＊
1940年代後半
32×24.5 油彩・板
個人蔵



奥瀬英三は1891年、現在の伊賀市上野農人町に代々醤油醸造業を営む商家「細平（こまへい）」の次男として生まれた。裕福な環境に育った英三は、京都市立第一商業学校に入学するが中退し、1912年に画家を志して上京、太平洋画会研究所で学んだ。1914年の第8回文展に《植物園》が初入選し、以降、帝展で続けて特選を受賞するなど頭角を現した。

奥瀬は1923年9月に起きた関東大震災で東京の自宅を焼け出され、郷里伊賀に戻る。翌年8月、上野寺町の念佛寺で絵画、彫刻を研究する蒼丘社を立ち上げ、地元の若い画家や画家を志す者たちを導く存在となった。1928年12月に再び上京し、1931年以降は埼玉県浦和市にアトリエ兼住居を構えて亡くなるまで同地で過ごした。東京、埼玉に移転後も教え子の濱邊、松浦らとは長らく交流が続き、郷里の美術や文化活動に対して助言を行っていた様子が遺された書簡類からも推測される。

漫画家を志した元永は、「漫画家は絵もうまくないと駄目」だと考えて、知人の紹介を経て洋画家、濱邊萬吉に師事した。初めて描いた油彩画は、濱邊から借りた能人形をモチーフにした絵だという。おそらくこの作品であろう。

7

濱邊萬吉 《卓上静物》

1930 年

90.9 × 117 油彩・キャンパス

三重県立美術館蔵



濱邊萬吉は1902年、伊賀上野の豪商として知られる「古喜（ふるき）」（古着屋喜兵衛）一族の分家、古喜荒物店の次男として生まれた。三重県立上野中学校を卒業後、東京美術学校への進学を希望し受験するも、近眼が原因で不合格となる。その後、一時帰郷した奥瀬英三のもとで絵を学び、1928年の第9回帝展に《窓際の静物》が初入選、その後も帝展、文展で入選が続いた。画家として展覧会に出品したほか、伊賀上野の建造物、句碑、文学碑、徽章、校章などの意匠を手がけ、また多くの書籍の装幀や観光パンフレット類の発行にも関わり、伊賀の知の巨人として文化を支える役割を果たした。

8

濱邊萬吉 《元永定正像》

不詳

31.5 × 22.5 油彩・キャンパス

個人蔵

9

芳名帳「山苑帳」

冊子

個人蔵



山苑雅廊は、濱邊萬吉の甥で写真家の濱邊喜代治（貴余晴 1914～2005）が1947年6月1日、現在の伊賀市上野赤坂町の自宅の一角に開設した画廊。同画廊の芳名帳「山苑帳」によれば、開廊間もない7月23日から27日まで、第1回山樹社展が開催された。山樹社とは、山苑雅廊を拠点に活動した絵画グループで、濱邊萬吉、荒木寛（1924～1999）、苗村武雄（1910～2005）、元永定正らが参加した。山樹社展はおおむね年に2回のペースで、1950年の第6回展まで継続されたが、最後の第6回展に関しては開催月日が芳名帳には記載されていないため、詳細は不明。山苑雅廊では他にも、哲学者の谷川徹三（1895～1989）を招いた座談会や、萩森久朗（1913～1991）、荒木寛、岩中徳次郎（1897～1989）らによる集団BLANCの展覧会などが開催され、伊賀の文化サロンの役割を果たしたとみられる。しかし、画廊としての活動は10年に満たない期間をもって閉廊した。

10

濱邊貴余晴 『濱邊貴余晴写真帖 伊賀万華鏡』

2001 年

書籍

個人蔵

濱邊萬吉宅には親戚で裏千家直弟子の茶道の先生が疎開していたといい、濱邊宅で茶会が催される日には伊賀の文化人が集まったという。茶会の模様を濱邊喜代治（貴余晴）が撮影した写真には若き日の元永が写されている。

11

元永定正 第6回山樹社展ポスター

1950 年

水彩・紙

個人蔵



12

「寅の春展」案内

1950 年

103 × 72.8 水彩、インク等・紙

伊賀市蔵



1950年元旦から6日間、山苑雅廊において開催された「寅の春展」では、廊主の濱邊喜代治が寅にちなむ全国の郷土玩具を、濱邊萬吉、荒木寛、元永定正らが絵画を出品した。この展覧会は、伊賀市の新春恒例行事「春展」へと受け継がれ、現在も継続されている。

13

「卯の春展」絵馬

1951 年

水彩・板

個人蔵

14

「卯の春展」案内

1951 年

30 × 20 水彩、インク等・紙

個人蔵

15

荒木寛 《面とワーヤン》

不詳

91 × 73 油彩・キャンパス

伊賀市蔵



描かれているのは、インドネシアの影絵芝居に使われる操り人形「ワヤン・クリ」やアジア、アフリカのものと思われる仮面である。これらの人形や仮面は、山苑雅廊の廊主、濱邊喜代治が収集したものであろう。荒木だけでなく、元永も山樹社で活動していた時期に《南方の人形》という作品を制作して山樹社展に出品しており、山苑雅廊や濱邊たちとの交流を通して、彼らが互いに切磋琢磨していた様子がうかがえる。

16

荒木寛 《城への道》

不詳

95 × 75 油彩・キャンバス

伊賀市蔵



17

荒木寛 《自画像》

1948 年

38 × 29 鉛筆・紙

伊賀市蔵



no.17 は荒木寛が鏡に映る自身の姿を描いた自画像、no.18 は元永が描いた荒木の像である。荒木のデッサンには昭和 23 年 6 月と年記があるので、山樹社で切磋琢磨していた頃の作品である。元永は神戸へ出てから抽象絵画に転向するが、荒木は生涯、風景を中心とした具象絵画に取り組んだ。のちの画風は全く異なる二人だが、荒木と元永の交流は以降も長く続いた。

18

元永定正 《荒木寛像》

1948 年

38 × 29 鉛筆・紙

伊賀市蔵



19

元永定正 《静物》

1947 ~ 48 年頃

31.5 × 41 油彩・キャンバス

個人蔵



20

元永定正 《婦人像》

1951 年

73 × 61 油彩・キャンバス

個人蔵



元永は三重県総合美術展覧会（三重県展）に第 1 回目から出品している。《婦人像》は第 4 回三重県展に出品し、教育長賞を受賞したとこれまで語られてきたが、第 4 回展の目録には記載がないため、別の回（1951 年の第 5 回展か）に出品されたものと思われ、現在調査中である。

21

元永定正 《踏切と柳》

1947 ~ 48 年頃

45.3 × 53 油彩・キャンバス

個人蔵



22

元永定正 《月とテラコッタのトイレ》

1947 ~ 48 年頃

45.3 × 37.8 油彩・キャンバス

個人蔵



23

元永定正 《風景》＊

1940 年代後半

24.5 × 32 油彩・板

個人蔵



24

元永定正 《笠置の桜》

1950 年頃

32 × 24.5 油彩・板

個人蔵



25

元永定正 《伊賀上野の風景》＊

1940 年代後半

32 × 24.5 油彩・板

個人蔵



26

元永定正 《城》

1950 年

60.5 × 72.8 油彩・板

個人蔵



上野城を描いた作品。第 4 回の三重県展目録によれば、元永は《城》と題した作品を出品している。この作品か、あるいは別構図の作品か、現時点では明らかではない。

27

元永定正 《社交ダンスの仲間たち》

1947 ~ 48 年頃

40.8 × 53.2 油彩・キャンバス

個人蔵



戦後すぐの時期、元永は山樹社での絵画発表や濱邊萬吉宅での茶会への参加の他にも、読書会、音楽鑑賞会、合唱団などさまざまな文化活動にいそしんでいた。社交ダンスもそのひとつで、木かつぎ（材木仲仕）の肉体労働を終えた後に毎晩のように通っていたという。

なお、社交ダンス教室のあった建物からは上野城がよく見えるが、元永は窓から城をのぞむ構図の絵画も描いている。

28

元永定正 ドローイング 8 点

1940 年代後半～ 1950 年代（推定）

インク・紙

個人蔵

仁丹、化粧品、靴みがきクリームなど、広告デザインの原案のようなドローイング類。これらのドローイングが実際に図案として使用されたのかどうかは現時点では不明である。

パリカンで髪を切られる男は元永の風貌とよく似ているので、自画像だろうか。床屋の親爺の顔もインパクトがあり、人物の特徴を戯画的にとらえる元永の筆が冴えている。左下には、「のりを（お）」という元永のペンネームが書き込まれている。

第2部 神戸へ、世界へ！

戦後すぐの時期から、郷里伊賀で濱邊らを通して文化的なサークル活動にいそしんでいた元永ですが、生活のため、仕事を求めて1952年に弟が住んでいた神戸に居を移します。アイスクリームのセールスマン、新聞拡張員、進駐軍要員などをしながら、西宮の美術教室に通って絵を勉強していた元永は、芦屋市展で抽象絵画と出会い、以降は抽象画や身近な素材を用いた抽象彫刻の制作に打ち込みます。

第8回芦屋市展（1955年6月）に出品した《寶がある》。この作品が審査員を務めていた吉原治良（1905～1972）の眼に留まり、吉原からの誘いを受けて、同年7月、芦屋公園の松林で開かれた野外展「真夏の太陽にいどむ野外モダンアート実験展」に参加します。ビニールシートにインクで染めた水を入れて吊るした作品は、吉原に「水の彫刻」と絶賛され、元永は吉原が主宰する具体美術協会の会員となります。以後、「具体」を活動拠点とし、50年代後半から60年代半ばにかけて、絵の具をキャンバス上に流して制作した作品によって、国内外での評価を固めます。

1966年にニューヨーク滞在の機会を得た元永は、アクリル絵の具とエアブラシという新しい素材技法に出会い、画風を大きく変化させました。明るい色彩、ムラのない色面でユーモラスなかたちを描き、明るく親しみやすい抽象画という元永独自の世界を築きます。〈おおらか〉で〈のびやか〉な元永のスタイルは絵画制作にとどまらず、立体造形、絵本、パフォーマンス、文筆や、他領域の作家たちとのコラボレーション等へと広がりを見せ、大人から子どもまで、あらゆる世代の人々に愛される芸術を生涯展開し続けました。

29

元永定正 《神戸・下山手の交差点》
1953年頃
22 × 27.2 油彩・キャンバス
個人蔵



30

元永定正 《茶色の裸婦》
1953年頃
73 × 53.3 油彩・キャンバス
個人蔵



西宮の美術教室に通っていた元永は、知人から芦屋にも市展があることを聞き、出品を決める。1953年の第6回芦屋市展に出品した《黄色の裸婦》（徳島県立近代美術館蔵）は、ホルベイン賞を受賞した。ここに展示する2点の裸婦像も同時期の作品である。

1948年に始まった芦屋市展は、当初から前衛的な傾向を持つ公募展であり、元永は芦屋市展で抽象画に出会い衝撃を受けたという。元永が抽象美術に転向し、吉原治良に出会う重要な場となったのが芦屋市展であった。

31

元永定正 《緑色の裸婦》
1953年頃
72.5 × 60.5 油彩・板
個人蔵



32

元永定正 《作品》*
1954年頃
27.2 × 21.8 油彩・キャンバス
個人蔵



1954年8月頃に結成された具体美術協会は、翌年1月に機関誌『具体』を発行、7月に芦屋公園において「真夏の太陽にいどむモダンアート野外実験展」を実施した。この野外展を見たいけばなの小原流家元、小原豊雲が『具体』の活動に共感し、吉原に会館の提供を申し出たことから、同年10月に東京・南青山の小原会館で第1回具体美術展が開催された。

第1回具体美術展には、野外展では発表できなかった絵画や平面作品も多数出品されている。元永も、しずく形の「水」の作品と多摩川で拾ってきて着色した「石」の作品に加え、絵画も多数発表した。

33

元永定正 《とんでいる》
1954年頃
60.4 × 72.5 油彩・キャンバス
三重県立美術館寄託



34

元永定正 《寶がある》
1954年頃
65 × 80.2 油彩・キャンバス
三重県立美術館寄託



35

元永定正 《作品》
1955年
91.2 × 116 油彩・キャンバス
三重県立美術館寄託



36

元永定正 《作品》

1955 年

65 × 80 油彩・キャンバス

三重県立美術館寄託



37

元永定正 《作品》

1955 年

60.5 × 73 油彩・キャンバス

三重県立美術館寄託



38

元永定正 《作品》

1955 年

65.5 × 100 油彩・キャンバス

三重県立美術館寄託



39

元永定正 《作品》

1956 年

65 × 80.5 油彩・キャンバス

三重県立美術館寄託



40

元永定正 《作品》

1957 年

50 × 61 油彩・キャンバス

三重県立美術館寄託



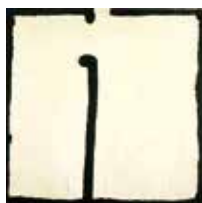
41

元永定正 《作品》

1957 年

91 × 91.5 油彩・板

三重県立美術館寄託



42

元永定正 《作品》

1957 年

45.3 × 52.7 油彩・キャンバス

三重県立美術館寄託



43

元永定正 《この形からⅡ》

1957 年

45.5 × 52.8

油性合成樹脂塗料・キャンバス

三重県立美術館寄託



44

元永定正 《作品》

1956 年

159 × 112 油彩・キャンバス

三重県立美術館蔵



45

元永定正 《Kiss》

1959 年

220 × 136 油性合成樹脂塗料・キャンバス

三重県立美術館寄託



かたちから絵の具がはみ出したことをきっかけに、元永は 1958 年頃から画面上に絵の具を流した作品の制作を始めた。日本画のたらし込みからヒントを得たというが、これは濱邊萬吉が描いた日本画などから見知っていたものだという。なお、全く偶然に絵の具が流れたかたちのように見えるが、実際は日頃描き留めておいたメモをもとにキャンバスに下書きをし、その上に絵の具を流す手法で制作されている。イメージとは異なるところへ流れた絵の具は拭き取られ消されることもあり、または新たな広がりを生み出すこともあったという。作品の上には、偶然と必然と自然が重なりあっている。

46

元永定正 《赤と黄色と》

1963 年

177 × 275

油性合成樹脂塗料、小石・キャンバス

三重県立美術館蔵



47

元永定正 《作品》

1966 年

225 × 182 油性合成樹脂塗料・キャンバス

三重県立美術館蔵



48

元永定正 《作品 Funny 79》

1967 年

213.5 × 274.5

アクリル・キャンバス

三重県立美術館蔵



1966 年、元永はジャパン・ソサエティの招聘により渡米し、ニューヨークでスタジオを借りて制作を始めた。画材屋でアクリル絵の具とエアブラシに出会い、かたちを中心に描く方向へと転換していく。「かたち」は 70 年代以降も進化をとげ、次第にキャラクター性を帯びたものへと展開していった。また、作品タイトルにおいても、絵の具流しの時代には「作品」とだけ付されているものが大半であったのに対し、特に 70 年代後半以降は色やかたちを表すひらがな表記へと変化した。この点もまた、難解なものと捉えられがちな抽象絵画のイメージを一新し、親しみやすさを与えている。

49

元永定正 《作品 ブルー》
1968 年
183 × 262
アクリル・キャンバス・板
三重県立美術館蔵



50

元永定正 《よっつのいろ》
1968 年
181.8 × 259.9
アクリル・キャンバス・板
三重県立美術館蔵



51

元永定正 《Piron Piron》
1975 年
275 × 183
アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



52

元永定正 《せんせん》
1979 年
227 × 181
アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



53

元永定正 《せんがおおゆれ》
1987 年
181 × 227
アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



54

元永定正 《ふたつしずく》
1987 年
193 × 259
アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



55

元永定正 《ひかり》
1997 年
182 × 227
アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



56

元永定正
《あかみどりとばっちりやらがれやら》
1998 年
200 × 300 アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



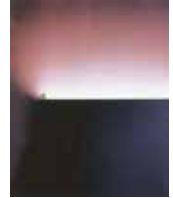
57

元永定正 《せんかたちいろながれ》
2005 年
197.5 × 291.3
アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



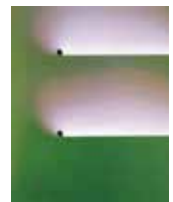
58

元永定正 《しろいひかりいちのくろ》
2007 年
227.2 × 181.8
アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



59

元永定正 《しろいひかりにのみどり》
2007 年
227.2 × 181.8
アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



60

元永定正 《ライブペイント》
2009 年
259 × 780 アクリル・キャンバス
三重県立美術館蔵



この作品は、当館で開催した元永定正展（2009 年）の会期中、エントランスホールで行われた元永のパフォーマンスイベントにおいて制作された。真っ白なキャンバスに、紙コップや筆で文字通り絵の具を飛ばして描かれた。即興的な作品ではあるが、絵の具の色を都度選び、どこにどう絵の具を流すかをコントロールしながら制作する様子が、当日の記録映像からも伝わる。生き生きと流れる色に注目していただきたい。

凡例

- 本展に出品した資料データである。
- 資料データは、作品番号、作家名、作品名、制作年、サイズ (cm)、技法・素材、所蔵の順に記した。
- 作品番号と展示の順序は必ずしも一致しない。
- 作品名の後ろに＊印のあるものは、本展にあわせて便宜的につけたものを表す。

謝辞

本展開催にあたり、下記の方々、機関より
多大なご協力を賜りました。
記して感謝申し上げます。
(順不同、敬称略)

中辻悦子 元永紅子
濱邊実得 岩名泰岳
北出楯夫 平木達郎
山本忠臣

ギャラリー山苑
伊賀市
公益財団法人伊賀市文化都市協会
宝塚市立文化芸術センター
兵庫県立美術館
跡見女子大学図書館



特集展示 生誕 100 年 元永定正展 記録リーフレット

執筆・編集 原舞子 橋本三奈（三重県立美術館）
会場写真撮影 松原豊
デザイン・印刷 株式会社アイブレーション
発行 三重県立美術館
発行日 2023 年 3 月 24 日